

中学校特別支援学級在籍生徒を対象とした 就労支援講座の実践の経緯と展望 —南アルプス市における支援モデルの構築に向けて—

○小田切 めぐみ（南アルプス市役所 こども応援部こども家庭センター 途切れのない支援担当）

1 はじめに

当市では、障害のある中学生が将来の就労を見据え、仕事や自己への理解を深める機会を提供するため、市の福祉部門と学校が連携し、「就労支援ワーク」という事業を実施している。本事業は、山梨県立こころの発達総合支援センターが平成26年度から27年度に、厚生労働省から委託を受けて実施した「発達障害者の思春期就労準備支援事業」の「思春期将来展望形成プログラム」を土台としている。平成27年度には、モデル事業として「南アルプス市発達障害者の思春期就労準備支援事業」が実施され、市内中学校の生徒を対象にプログラム内容の展開が行われた。その後、委託事業の終了に伴い、市の事業として引き継がれた。

令和3年度までは障がい福祉課が主に運営を担ってきたが、令和4年4月にこども家庭相談課（現・こども家庭センター）が創設され、発達支援の体制づくりや人材育成を担う「途切れのない支援担当」に運営が引き継がれた。

本稿では、事業の持続的かつ効果的な実施を目指し、「途切れのない支援担当」として検討を重ねてきた、中学校の特別支援学級に在籍する生徒を対象とした就労支援ワークの実践について、その経緯と展望を報告する。

2 就労支援ワークの概要

本事業は、こども家庭センターの「途切れのない支援担当」が中心となり、市内の関係機関と連携して実施している。本センター職員と中学校の教員からなる実行委員会を年に3回開催し、連携体制のもと進められている。対象は市内中学校の自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する生徒で、学校の教育課程では「自立活動」として参加している。年に一度の開催をとおして、生徒が将来の就労について考え、働くことのイメージを持つこと、自己への理解を深める機会を提供することを目的としている。

3 就労支援ワークの実践内容及び経緯（表1）

（1）令和4年度（参加者数：6校・28名）

「働くとは何か」を考える事前講座と、市内の事業所での就労体験を実施した。本取組では、事前学習と就労体験のそれぞれに、成果と課題が見られた。成果としては、事前学習では生徒同士で声を掛け合ってグループワークを取り組む様子がみられ、仕事をするうえで大切なことは何か

を考えるきっかけを提供できていたと考えられる。就労体験では、作業内容について簡単すぎず難しすぎない内容で、生徒が成功体験を積むことができたという意見もあった。一方で課題も明らかになった。事業終了後、各校で感想を伺ったが、事前講座の内容は抽象的であり理解までにいたらなかったのではないかという意見や、就労体験に対する生徒の感想が「楽しかった」にとどまり、事前講座の内容と就労体験を関連付けて考えられていない様子が見受けられた。このことから、単に就労体験の機会を提供するだけでは、生徒が仕事の本質的な理解に至ることは難しく、自らの将来展望と結びつけて考えることにも限界があるという課題が把握された。

（2）令和5年度（参加者数：6校・27名）

前年度の反省を踏まえ、思春期の発達段階を改めて考察した。この時期は、ピアジェの認知発達段階説において、仮説演繹的な推論が可能となる形式的操作期にあたり、抽象的な思考力が発達する。また、エリクソンのライフサイクル理論では「自己同一性の獲得」が重要な課題とされており、「自分とは何か」を深く考える時期でもある。発達がゆっくりである生徒の場合、このような自己を理解する過程には、特別な配慮が必要であると判断した。

このため、事前講座の講師に、障害のある生徒のキャリア教育に関する有識者（国立特別支援教育総合研究所研究員）を迎える、障害のある生徒に必要な自己理解について検討を行った。その際、参考としたのは、「社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現していく過程」を意味するキャリア発達の考え方である。検討の結果、社会で自分の役割を果たすうえでは「どのような仕事をするうえでも重要な基本的な力」について、自分らしい生き方を実現するうえでは「苦手なことへの配慮要請を含めた多角的な自己理解」について、分かりやすい学びが必要であるとの結論に至った。

さらに、学校教育との接続についても検討を進めた。生徒が将来働くうえで必要となる力と、現在の学校生活における学びとがどのように関連しているかをイメージしやすくするため、ポイントについて分かりやすい表現で整理した。この整理にあたっては、まず、本事業で扱う自己理解のポイントとして、「自分ができる・意義を感じる・やってみたい活動への気付き」「苦手なことへの工夫や配慮要

請の必要性への気付き」に焦点を当てることとした。また、事業所での体験が仕事や自己への気付きと結びつきやすくなるよう、前年度までの取組において協力を得た市内の事業所に対し、仕事をする際に重要となるポイントを聴取し、そこから抽出された共通点を、「仕事をするうえで重要となる基本的な力（以下「仕事をするうえでのポイント」という。）」として6つに整理した。

これらのポイントに基づき、事前講座ではスライド資料を用い、就労体験の事前説明に加え、仕事理解と自己理解について分かりやすく説明した。また、「自己発見ワーク」を通じて、生徒の自己への気付きを促した。就労体験時には、教員や事業所職員に対し、これらのポイントと関連付けたフィードバックや振り返りを生徒に行うよう依頼した。

取組の成果として、事前講座では学習ポイントを分かりやすく伝えることができた点が挙げられる。また、就労体験では、多くの生徒が事後アンケートにおいて「できた」と回答しており、自己肯定感を育む一助となったことが確認された。一方、課題も明らかになった。事前講座は座学中心の構成であったため、生徒の集中力に課題が見られた。就労体験においても、事前に学んだ内容を意識して活動に取り組み、自らの行動を適切に自己評価することの難しさがうかがえた。さらに、事前講座と就労体験が別日程で実施されることから、学校や事業所との密接な連携体制を構築しなければ、指導の一貫性が保たれず、十分な学習効果が得られないという課題も認識された。

（3）令和6年度（参加者数：3校・17名）

前年度の反省を踏まえ、事前講座の講師を交えて検討を行った結果、就労体験に先立ち、仕事に取り組むうえでのポイント理解を促す導入体験として、「就労支援講座」を実施する必要があると判断した。これを受け、従来の事業所での就労体験を、構造化された環境での模擬体験に置き換えるとともに、本取組について以下の改善を行った。

第一に、活動の対象を、原則として中学1年生とし、これから進路について情報を得ていく生徒に焦点を合わせた形で活動内容を構成した。

第二に、より直感的にポイントを理解できるよう、前年度作成したポイントを「①話を集中してよく聞き、仕事内容を理解する」「②集中して正確かつ丁寧に取り組む」

「③わからない時は質問、困った時は相談、終わったら報告をする」「④気持ちの良い態度で人と関わる」「⑤たすけあう」の5点に再整理した。

第三に、生徒の集中力及び学習への動機づけを考慮し、講師の講話内容を動画教材に置き換えた。動画では、「仕事博士」というキャラが登場し、仕事理解や自己理解の重要性と交えて、ポイントについて解説した。その後、体験前の「自己発見ワーク」に取り組んだ。

第四に、事業所での就労体験に替えて導入した模擬体験では、「①グループで行うピッキング体験」「②請求書と納品書の数値チェック」「③プラグタップの組み立て」を実施し、生徒はこの中から2つの作業を体験した。なお、②③については障害者職業総合センターのワークサンプル幕張版を活用した。模擬体験時は、講師が活動を主導し、教員とスタッフがポイントに基づく声かけを行った。また、「ヘルプカード」を用意し、困ったときは援助を求められるよう促した。模擬体験の終了後は、口頭での振り返りと内容の共有を行った後、体験を経て自分自身について改めて考えるための「自己再発見ワーク」を取り組んだ。

取組の成果としては、生徒が動画視聴や模擬体験に集中して取り組んでいたことに加え、一部の生徒においては、自分の苦手なことにも目を向ける姿勢が見られた点が挙げられる。教員からも、生徒が自分の進路や得意・不得意について考えるきっかけになったとの意見が得られた。また、教員自身にとっても、就労を見据えた学校段階からの取組の重要性や、学校における支援の可能性について理解を深める機会となった。一方で、生徒が自分の行動を適切に自己評価することの困難さは、本年度も課題として残された。この背景には、支援方針に関する関係者間での共通理解の不足があると考えられる。その結果、生徒の失敗を避けることを優先した過剰な声かけや、学習ポイントと関連付けた適切な支援が十分に行われていない場面が見られた。

表1 就労支援ワークの内容

	内容	活動
令和4年度	事前講座(1時間)	「働くとは何か」を考える講話(アイスブレイク、グループワーク含む)
	・事業所での就労体験(1時間30分) ・講義会場での振り返り(30分)	実際に就労現場に行き、以下の内容(各自選択)を体験する。 (インカートリッジの選別／洗車／資源ごみの分別／コンビニの品出し／消防訓練体験)
令和5年度	事前講座(1時間15分)	・就労体験についての事前説明 ・仕事理解、自己理解についての講話 ・「自己発見ワーク」の実施
	事業所での就労体験(2時間)	令和4年度の内容に、さらに以下の体験を加えて実施。 (いちごの苗植え替え／デイサービスでの整容補助／画像編集)
令和6年度	就労支援講座(2時間10分)	・仕事理解、自己理解についての講話(動画教材) ・模擬的な仕事体験 ・体験前後の「自己発見ワーク」「自己再発見ワーク」の実施

4 今後の展望

今後は、関係者間で連携しながら、生徒が自己評価を適切に行えるよう支援を行うとともに、学校教育との接続を強化する方策を検討していく必要がある。また、当市の地域資源を活用し、講座を継続的に実施できる仕組みの整備も重要である。そのうえで、事業所での就労体験の機会の提供について、地域全体で協議を重ね、現実的かつ効果的な実施方法を検討していく必要がある。